国語科学習指導案（１限）

授業者　金子直樹
クラス　１年Ｂ組 41 名（男子 21 名、女子 20 名）
場所　　１年Ｂ組ＨＲ教室

１，単元　古典の学習を通して、現代に生きる意味を考える。

２，単元のねらい

国語科におけるリテラシーとは、テキストを正しく理解するという能力だけではない。テキストをそのように読み取る自己と、テキストの向こうにいる作者の対話を通して、自己の認識を更新し、深化してゆく力であると考える。また、学習指導要領では古典の指導について、「古典としての古文や漢文を理解する基礎を養い古典に親しむ態度を育てる」（「第３　指導計画の作成と内容の取り扱い」中の、１（４）イ）とあるが、古典を「遠い世界の面白いお話」として読むだけでなく、作者が問いかけている内容を明らかにして、それに対する生徒自身の回答を作りだしてゆくことによってこそ、現代に生きる生徒と時代を隔てた古典との間に交通する回路が成立するのであり、古典が親しみのあるものになると思われる。

本単元では、随筆（『徒然草』）・説話（『宇治拾遺物語』）を読むことを通して、その中に表わされている、人の「思い込み」や「とらわれ」という心性を捉え、また、その表現の滑稽さや意外さを文章に即して具体的に読み取ることを通して、生徒が自身を相対化し自己認識を深めることを目指す。

３，単元目標

①古典の文章に慣れ、語句の意味や内容を正確に理解する。
②人物や出来事についての描き方から作者の意図を正しく読み取り、それに対して答えることで自らの考えを深める。

４，単元計画（教材構成）　全８時間

①『徒然草』１－作者「兼好」との対話／直接的に示されるメッセージを読む。
第５２段「仁和寺なる法師」（少しのことにも先達はあらまほしきことなり。）
第２３６段「丹波に出雲といふ所あり」（上人の感涙いたづらになりにけり。）
第２０６段「徳大寺の故大臣殿」（怪しみを見て怪しまざる時は、怪しみかへりて破る。）
②『徒然草』２－作者「兼好」との対話／兼好のメッセージを読み解く。
第８８段「ある者、道風が書ける和漢朗詠集とて持たりけるを」
第５０段「応長のころ、伊勢の国より女の鬼になりたるを率て」
③『宇治拾遺物語』－「説話」の語り手との対話／作品のメッセージに答える。
第１０４段「猟師、仏を射ること」※本時
第３２段「柿の木に仏現ずること」

５，単元の評価規準

「Ｃ読むこと」

①国語への関心・意欲・態度

・古典の文章に親しみ、内容を正確に読み取ろうとしたり、現代に生きる自分の問題として捉えようとしている。

②読む能力

・語句の意味や内容を、文章の展開に即して正確に理解している。

・人物や出来事についての描写の仕方に注意すること、また、類似の内容の文章を比べ重ねて読むことで、作者の意図を正しく読み取っている。

・作者の示す問題に回答することを通して、自分自身に対する考えを深めている。

③言語についての知識・理解・技能

・古典に用いられている単語を、文脈に応じて理解している。

・古典を正しく音読し、また、場面にふさわしい音読の仕方を理解している。

6，本時の目標

①『宇治拾遺物語』「猟師、仏を射ること」の内容を正確に理解する。

②この説話（語り手）が問いかけていることに対して、現代の自らの問題として捉えて答える。

③正しく、また効果的に音読をする。

7，授業展開過程

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の実際
	導入　学習記録を読む ①『徒然草』での学習をふまえて、本時の内容を確認する。	・前時までとは異なり、具体的な作者「兼好」で無いことに注意を喚起する。	
５分	展開Ⅰ 「猟師、仏を射ること」の叙述内容を読み取る。 ①範読を聞き、音読する。 ②読みのめあてを立てる。 ・どのような「とらわれ」が存在するのか？ ・「とらわれ」ているのは誰か？	・教科書挿絵を用い、当時の信仰のあり方については説明をする。 ・『徒然草』206 段、50 段での怪異譚をふりかえる。	・声を出していること、正しく音読していることで評価。
１５分	③表現に即して正確に読み取る。 ・「普賢菩薩」出現の描き方を読み取る。 ・聖と猟師との人物像を捉える。	・聖と童の会話の描写（口調）に注意する。 ・聖の厚い信仰心、猟師の惑いの心をまとめる。	・音読の際に、人物により強弱高低をつけようとしていることで評価。